

書評：『ブッククラブと民族主義』：竹岡健一著
九州大学出版会2017年

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/2004797>

出版情報：かいろす. 56 (別冊), pp.95-103, 2018-11-17
バージョン：
権利関係：

〔書評〕『ブッククラブと民族主義』
(竹岡健一著 九州大学出版会 2017年)

福元圭太

【はじめに】

竹岡健一氏の著書『ブッククラブと民族主義』（九州大学出版会、2017年）は、日本には馴染みのないブッククラブのドイツにおける発展と、その社会的役割を論じる第Ⅰ部、それら多数のブッククラブの中から、民族主義的な傾向を持つ「ドイツ家庭文庫」を事例研究としてフォーカスし、このクラブとナチズムとのかかわりを論じた第Ⅱ部からなる。またこの第Ⅰ部と第Ⅱ部の間に「余論」として「ブッククラブ総説」を挟み、最後にブッククラブの社会的役割と民族主義との関係についての論述をまとめ、考察を加えている。

本書のユニークさは、これまで本邦においては文学研究の対象とされることがほとんどなかったブッククラブ、すなわち「会員制の廉価書籍販売組織」(3)^{*}を対象とし、ドイツの書籍学——書籍の印刷、普及・販売、受容を主な対象とし、学際的な研究を行う Buchwissenschaft (7)——分野の（これもまた本邦ではほとんど知られていない）研究成果をふまえ、ドイツの大学や図書館が所蔵する膨大な資料を渉猟して、包括的かつ極めて実証的に論述を進めている点にある。

※ (3) は同書3頁を指す。以下同様。

【本書の構成と概要】

本書第Ⅰ部は二つの章からなる。第一章では1945年までのブッククラブの発展が跡付けられる。論じられるのは、特にワイマール共和国時代のブッククラブの隆盛、ブッククラブの経済的・内容的特性であるが、興味深いのは、伝統的な書籍販売業者がブッククラブを脅威と感じ、ネガティブ・キャンペーンを展開して、クラブとかかわりのある作家の本の販売をボイコットした経緯が明らかにされる点である。ここではさらに、新興ブッククラブに対抗するために伝統的な書籍販売業者の方が設立した、既存勢力によるブッククラブの詳細も取り上げられている。またナチスによるブッククラブの統制と、ナチス体制下におけるごく一部のクラブの発展についても言及されている。

第二章で取り上げられるのは1945年以降に、ドイツ連邦共和国で設立されたブッククラブである。この章では、伝統的な書籍販売業とブッククラブとの間に、戦後になってもなお続いていた競合と葛藤の詳細が明らかにされる。また、大戦後（旧）西ドイツのブッククラブを代表する「バルテルスマン読書愛好会」の設立経緯と独自の戦略（後述する「二段階販売システム」や経営の多角化）について論じられている。経営の多角化にすでにブッククラブ衰退の予兆が内包されて

いたという分析は鋭い。

第I部と第II部に挟まれた「余論」は、その控えめなタイトルに反して圧巻である。これはブッククラブ総覧と言うべきもので、1945年以前のドイツにおける52のブッククラブそれぞれの思想的傾向、設立年、関連団体、会員数、会員資格、読者層、提供された書籍のタイトル、会員向け雑誌の有無やその内容、伝統的な書籍販売業との関係、ナチズムとの関係のみならず、提供された書籍の装丁までもが徹底的に調査されている。情報が豊富で、資料的な価値も極めて高いこの「余論」をもって、読者は戦前のブッククラブ全体を通覧できるのである。

第II部も二つの章から成る。第一章は「ドイツ家庭文庫」そのものの分析に先立ち、この文庫の母体となった、後述する「ドイツ民族商業補助者連合」における教育活動——職業教育、語学を含む一般教育——や、その手法ならびにメディア（講演、スライド、映画等）が分析され、それらの主として青少年に対する教育が、民族主義からナチズムへと接近していった経緯が明らかにされる。

第二章ではブッククラブ「ドイツ家庭文庫」の活動とその民族主義の関わりがトレースされ、このブッククラブが読者層の右傾化とナチス政権の成立に大きく関与したことが明らかにされる。面白いのは、ここでも本の装丁が問題になることである。「総クロース装丁と民族主義の結びつき」といった視点は著者に独自のものであろう。またイデオロギーの宣伝において、クラブの雑誌が果たした重要

性も強調されている。

最後に、簡潔な終章が置かれる。さらに補足資料として「ドイツ家庭文庫」の主要シリーズ一覧が掲載されており、具体的にどのような本が提供されたのかを知ることができる。

以下では若干のコメントを挟みつつ本文の記述を追い、本書の内容をさらに詳しく見てみたい。

【第I部】

第一次世界大戦後、本の読み手は教養市民層から幅広い読者層へと移行した。これは読書の「大衆化」でもあるが、19世紀以来の国民教育や労働者教育の成果でもあると第一章冒頭で竹岡氏は言う。社会はイデオロギー的、政治的、宗教的に「細分化」(24)され、多様な本が必要となったのである。しかし一方で戦争とインフレによって戦前の文化エリートたちは貧困化し、他方で小市民や労働者階級にとって本の購入は多大な経済的負担を意味した。氏は、ブッククラブはこのような状況を打開するために登場したと見る。「伝統的な書籍販売の枠外で、安い本を、と同時に多様な本を提供」(24)するシステムがブッククラブだったのである。

店頭通常価格よりも約30%安いと言う研究もあるように(27)、ブッククラブが提供する本にはかなりの割安感があった。しかしながら伝統的な書籍販売業者の陣営から見れば、ブッククラブはいわば「商売敵」として当然ながら敵視されることとなった。伝統的な書籍販売業者たちも最初は「静観」(35)していたが、危険視

するようになるまでに時間はかからなかった。しかしながらブッククラブが伝統的な書籍販売業者から本当に「顧客を奪ったか」どうかについては、何とも言いえないところがあると氏は指摘する。竹岡氏は先行研究を参照しながら「ブッククラブの会員は、もともと小売店で本を買う習慣がなかったり、期待する本が小売店で見いだせなかったりした人々であり、小売店とブッククラブでは顧客層が違っていた」（40）可能性を指摘している。さらにブッククラブは、これまで未開拓だった読者層、つまりは新しい市場を開拓したのであり、それは伝統的な書籍販売業者にとっても歓迎すべきことであつたはずである。しかし伝統的な書籍販売業者は自らの市場が奪われるという危機感を優先し、ブッククラブの発展を阻害する方向に進んだ。この辺りの事情は、近年の日本における出版事業をめぐる問題を髣髴させる。安価な中古本を扱う新古書店やネット書店だけでなく、本自体が電子化されることで、「紙の本」を扱う書籍流通業者、特に「街の本屋」の変貌と消滅が急速に進んでいることについては多言を要さないであろう。

さて、ブッククラブに対する伝統的な書籍販売業者によるネガティブ・キャンペーンは、たとえばブッククラブで本を提供している作家に対する販売のボイコット（47）、そのような作家の「ブラックリスト」（48）の公表にまでエスカレートした。このようなキャンペーンに対するブッククラブ側からの訴訟ケースについても竹岡氏は詳述している。この訴訟

は結局和議に終わった。しかしこの和議は伝統的な書籍販売業者にとって実質上の「敗北に等し」（52）く、伝統的な書籍販売業者側には、将来はブッククラブと共存していかなければならないという認識が生まれたと氏は述べている。

第二章で竹岡氏は、ブッククラブが戦後のさらなる「読書の民主化」（76）へ貢献した事実を追う。読者層、すなわちブッククラブの会員の職業は「学歴が低く、地位の低いサラリーマン」、「下級と中級の公務員」、「熟練労働者」（77）へと広がっていった。読者層の拡大が可能になった背景として氏が言及するのは、「装丁の割に安い本」の提供という半ば美的な論点——「半ば」と言ったのは、それ以外の側面があるからであるが、それについては後述する——、また「気後れ」（Schwellenangst）の克服という心理的な論点、これら二つのユニークな論点である。後者は「書店が持つ『文化エリート的なイメージ』が教養の低い人々に心理的不安を引き起こし、書店で本を買うことから遠ざけていたのに対し、ブッククラブは、カタログによる販売を通じて、書店に赴く必要のない、気楽な本の購入方法を提供したという見方」（77）を指す。ここには教養市民層の没落と大衆の——「気後れ」しながらの——台頭というダイナミズムが感得できるであろう。

現代的なブッククラブの典型として竹岡氏は「ベルテルスマン読書愛好会」を取り上げ、その設立経緯、特色、そして独自の「二段階販売システム」（Zweistufiges Vertriebssystem）（82）につ

いて詳述している。「二段階販売システム」とは、伝統的な書籍販売業にブッククラブ新規会員の勧誘業務と会員サービスを委ねることを指す。つまり新しい会員の獲得とケアをベルテルスマン社が行うのではなく、外部の書籍販売会社が代行し、ベルテルスマン社はそれらの会社に代価を支払うというシステムを意味する。これによって伝統的な書籍販売業者との緊張関係が緩和されるだけでなく、宣伝力・勧誘力が高まり、その結果利益が向上することとなった。販売部門をブッククラブから切り離したこのシステムの採用によって、「会員の獲得、会費の管理、カタログの送付、注文されたタイトルの引き渡し、クレームへの対処」(98)といった会員サービスの大部分が伝統的な書籍販売に委嘱されることになった。それによってベルテルスマン社の業務は大幅に軽減され、ブッククラブとしては「プログラムの作成、本とカタログの生産、在庫管理、販売会社への供給」(98)という管理運営業務だけをこなせばよいことになった。また伝統的な書籍販売業者にしても売り上げが増えることが自分の利益にもつながるので、ブッククラブといわばウィン・ウインの関係を構築できたのである。

「二段階販売システム」と並びベルテルスマン社に際立った特徴は、その経営の多角化にある。提供されるものが本だけでなく、レコード、後にCDといった音源に拡大されたのである。さらにはゲーム、カメラや工芸品、ツアー旅行、写真現像サービスまで扱うようになり、最終

的にはコンピュータ・ソフトや家具、クレジットサービス、保険業、携帯電話等々にまで手をひろげた。1950年代には、音源の再生機器を持たない会員向けにポータブル・レコードプレーヤーやステレオ装置まで提供され、数年後には「ベルテルスマン社はドイツ最大のレコード再生装置販売者となった」(104)。これら経営の多角化を竹岡氏は、逆説的にブッククラブ衰退の予兆と捉えている。それはベルテルスマン社がブッククラブの本来の目的から逸脱し、総合的な「余暇産業」(Ferienindustrie) (118) 企業になったことを意味するのであり、本と競合するさまざまなメディアが本の地位を篡奪していくことを如実に表すからである。このメディアの多様化と余暇の過ごし方自体の多様化という傾向は近年特に強く意識されているが、ドイツではすでに1950年代に「本離れ」の芽が育ちつつあったこと、またそれがブッククラブという本の供給システムの自壊という過程の副産物であったという指摘は新鮮である。先にも言及したように、「街の本屋」は消え、レコード屋もほぼなくなった。CDショップも同様である。事情はよく知らないが、ゲームもオンラインになっていゆるゲームセンターも少なくなっているのであろう。この趨勢を余暇の民主化ないし大衆化ととるか、メディア産業による余暇の操作ととるかはまた別の問題である。

【余論】

余論については是非本書を参照いただ

きたい。竹岡氏は52のブッククラブ（1945年までのもの）を7つのカテゴリーに分類し、その総覧を示している。それらは1.先駆的ブッククラブ、2.市民的な読者を持つブッククラブ、3.特殊な読者を持つブッククラブ（読者会員がロマン主義の文学・絵画・音楽の愛好家、自然と狩猟の愛好家、演劇愛好家等に特化されている）、4.宗教的ブッククラブ、5.保守的・国家主義的ブッククラブ（この中に第II部で詳述される「ドイツ家庭文庫」も含まれる）、6.左翼的労働者ブッククラブ、7.書籍販売のブッククラブ（小売書籍販売業者と協調関係にあった）である。

【第II部】

第II部で詳細に検討されるのは、保守的・国家主義的ブッククラブの一つである「ドイツ家庭文庫」である。竹岡氏は1994年頃からルイーゼ・リンザー文学を研究され、リンザーとナチズムに関する論文で博士号を得ている。リンザーは1934年から1937年にかけて、8編の文章を『かまどの火』（Herdfeuer）という雑誌に載せているが、この雑誌が「ドイツ家庭文庫」から刊行されたものであることから、氏はまず「ドイツ家庭文庫」に関心を向けた。そこから視野と領域を拡大し、ブッククラブ全体の研究を開始したという。本書もこの第II部の骨格の方が先に完成しており、その後にはブッククラブ全体に関する第I部が書かれたという（8）。

「ドイツ家庭文庫」を理解するためには、その読者層を明確にすることが必須であると氏は言う。それは「職員」

（Angestellte）でありまた「商業補助者」（Handlungsgehilfe）であった。サラリーマンや勤め人と同義の前者は、20世紀への世紀転換期に生じ、急速にその厚みを増した新中間身分である。急増した原因は、旧中間身分の中小生産者が工業化に伴って「職員」に転職したこと、大規模店舗（百貨店等）の出現によって女性や徒弟といった未熟練労働者が「職員」として新たに多数発生したこと、また（ドイツでは1871年に）職業の自由が認められ、労働市場にユダヤ人が多数流入したこと等に求められる。1907年には150万人であった「職員」は、1930年には390万人を数えた。この20数年間で倍以上に増えているのである（222）。後者の「商業補助者」とは、何らかの商業的機能を有する企業において雇用され、給与を得ている者、つまり「徒弟の期間を終えて商店や企業に正式に雇用された後、自らが商人として独立するまでの間にある商業職員」（222）を意味する。この層の労働者も爆発的に増加している。1887年には47万人であったが、1930年には250万人、つまり40年余りで約5倍に増えているのである（222）。これら商業補助者の多くが所属していた「ドイツ民族商業補助者連合」（1893年設立）は、「労働組合らしからぬきわめて保守的な信条を有して」（222）いた。それは厳しい資本主義的競争によって零細企業が淘汰されていく中で、商業補助者の多くが独立できない被雇用者のままに留まってしまうという状況が生まれ、彼ら自身がプロレタリア化されかねないという危機感から来るもの

であった。企業家とプロレタリアの中間身分に位置し、「民吏」(Privatbeamte[r]) (223) ないし頭脳労働者を自認していた商業補助者にとって、いわゆるブルーカラー、すなわち肉体労働者ないしプロレタリアートと自分たちを区別することは重要であった。それゆえドイツの商業補助者たちは、マルクス主義やインターナショナルな社会民主主義と一線を画し、自らの労働条件の改善に取り組みつつも古い枠組みを温存しようという矛盾した行動をとった。また自らの存在を脅かしかねないユダヤ人労働者や婦人労働者を排除しようとしたのである。「ドイツ民族商業補助者連合」のイデオロギー的宣伝は、民族主義、国家主義、反共産主義、反ユダヤ主義の刻印を帯びており、会員の多くはナチズムのイデオロギーに対し、最初から親和的であったと言えよう。氏が商業補助者たちに注目するのは、それによってドイツの「因習的な中間層イデオロギーがナチズムと合流した過程を明らかにする」(224) ことができると考えるからである。

竹岡氏はその後、「ドイツ民族商業補助者連合」における教育活動を1.職業教育、2.一般教育、3.青少年教育に分類し、分析と考察を加えている。さらに国粹的な「フィヒテ協会」についても考察を加えているが、これらの詳細(事実、まことに詳細な記述と分析である)については、本書そのものを参照されたい。

第二章で展開されるのは、「ドイツ家庭文庫」そのものと民族主義に関する論述である。1916年に当初「ドイツ民族家庭

文庫」という名称で発足したこの団体の目標は、商業補助者とその家族に対して「民族主義的な信条に沿った読書指導を行うこと」(301)にあった。この文庫の目標は、氏が引用するヴァルター・ラムバッハの言によれば、「ハインリヒ・ハイネのざれ歌」を読む家庭に「真にドイツ的な精神」を吹き込み、「非ドイツ的な気質の侵入を防ぐための城塞」(302)を築くことにあったということになる。「自由主義的な文壇に対抗する前線」(302)となったこの団体は、第一次世界大戦後もかの「1914年の精神」を標榜し、1926年以降の顧問にはハンス・グリム、エルンスト・ユンガー、コルベンハイアーらが名を連ねている。この団体のカタログ雑誌こそが、ルイーゼ・リンゼーが寄稿していたという件の『かまどの火』である。『かまどの火』1934年の第3号・第4号における読者へのアピール(308)には、ドイツ的な「血と土」の文学を擁護し、都会の「アスファルト文学」を拒絶するナチス・イデオロギーの典型が見られる。コルベンハイアー、ハンス・グリム、グリーゼ、ヴェーナー、メヒョーら、いわゆる郷土文学(Heimatliteratur)の作家たちは称揚され、けなされるのはレマルク、フォイヒトヴァンガー、デーブリーン、レオンハルト・フランクラ、反戦・平和主義的な、ないしユダヤ系の作家たちであった。

このブッククラブと会員との間には強い「信頼関係」(334)が維持されたが、それは特定の世界観を持つクラブ側の意図と、「それを進んで受けようとする購読

者の心構え」（334）の相互関係に帰せられると竹岡氏は分析している。会員の多くが「同文庫と同じ愛国主義的・民族主義的な世界観を持っていたと考えて間違いないであろう」（336）というのが氏の見立てである。

興味深いのは、竹岡氏が本の装丁の重要性を指摘している点である。新中間層である商業補助者たちに提供されるこのクラブの本は、安価な割に「上質な本物の素材を用いて入念な作業によって作られ、内容とも統一が図られており、非常に美しく芸術的だが、かといって必要以上に飾り立てられてはおらず、丈夫で長持ちする実用性をも備えて」（341）いた。氏は先行研究を引き、装丁の立派な本を並べるといって「教養市民的なオーラ」が彼らにとっては重要であり、この家庭文庫が彼らにとって「プロレタリア化の不安を追い払うためのお守り」（342；傍点は竹岡氏による）として機能していたことを強調する。装丁の立派な本を並べる行為は、自分たちが教養市民の遺産の相続人であることを自認するための象徴的行為、ないしは自己慰撫ということになるであろう。我々は直ちに身につまされるものを感じるし、百科事典ブームや、更に遡って昭和初期の改造社、春秋社、春陽堂らの円本ブームを想起するであろう。竹岡氏もまた、これら読むためというよりは「見せるための」円本について言及し、円本とブッククラブの興隆期がともに1920年台であること、また両者が共に新中間層を主な購買層としていることを指摘している（345）。

「ドイツ家庭文庫」はナチスに親和的ではあったが、その母体である「ドイツ民族商業補助者連合」が1933年5月にドイツ労働戦線に取り込まれたのち、1934年末には完全に解体されてしまうという全体主義的な Gleichschaltung の中で、その活動基盤を失っていった。新たな会員の勧誘と受け入れは禁止され、購読者も大幅に減少した。開戦後もかろうじて命脈を保っていた『かまどの火』も、1941年4月号をもって、刊行が停止されたのである。

【終章】

終章において竹岡氏は、ブッククラブが社会の中層・下層の人々への配慮を欠いた伝統的な書籍販売業の欠点を補い、「読書の民主化」という社会的役割を果たしたことを評価する。しかしそれが返す刀で特定のイデオロギーを喧伝するシステムともなってしまう、そのイデオロギーが、たとえば「ドイツ家庭文庫」のそれのように「著しく民族主義的」である場合、「ナチズムという負の歴史に対する責任の一端を引き受けることになってしまった」（426）として、ブッククラブの功罪を明らかにしている。

以上章を追って本書の内容を紹介するとともに、主として近年の日本の出版事情に関する若干のコメントを付してきた。

一つだけ「ないものねだり」をすれば、ブッククラブの雑誌やパンフレットからだけではなく、代表的なブッククラブのいわば「お抱え」の作家たちの実作から、

特長的なテキストも読んでみたかった。特に「ドイツ家庭文庫」で1928年以降に取り上げられている(432以下)アードルフ・バルテルス、コルベンハイアー、ハンス・グリム、グリーゼらの「血と土」ないし「反アスファルト」文学の典型が引かれていれば、このブッククラブのイデオロギーが読者にさらに印象づけられたであろう。もっとも様々なブッククラブが取り上げた作家と本の数は膨大なので、恣意性を排除するため、竹岡氏はその中のいくつかだけを選択的に取り上げるのを控えておられるのかもしれない。

本邦ではブッククラブが研究対象とされることはほとんどなく、わずかに英米のいくつかのブッククラブに関する研究が散見される程度(470)であるという。ドイツにおけるブッククラブを包括的で網羅的に、かつ実証的かつ詳細に取り上げた本書は、文学の受容と流通という文芸学ないしメディア学、社会層とイデオロギーの伝播という社会学、ドイツ近代とナチズム、あるいは教養市民層の没落と大衆の台頭という歴史学ないし政治学、本の装丁という美学、またその美学を利用した「教養」の篡奪という心理学、もちろん書籍学、書誌学と文献学そのものに互る労作である。各種の数字データを整理した竹岡氏の作成になる一覧表も有用であるし、随所に掲載されているブッククラブの書籍や雑誌の表紙も実に楽しい。本書をもって日本の読書界はまた一つ豊かになったと言える。

なお、本書『ブッククラブと民族主義』

はつとに、「日本出版学会」による、2017年度・第39回「日本出版学会賞」に輝いている。氏は「日本出版学会」の会員ではないそうであるが、「日本出版学会」は、学会賞の対象を学会員の業績に限定せず、広く学会内外の出版研究の成果物を対象としているとのことである。2018年4月16日にリリースされた「第39回 日本出版学会賞審査報告」によれば、「第39回日本出版学会賞の審査は、『出版の調査・研究の領域』における著書および論文を対象に、『日本出版学会賞要綱』および『日本出版学会賞審査細則』に基づいて」、2018年2月5日、3月12日の2回開催されたという。「審査結果」(<http://www.shuppan.jp/jyusho/997-392017.html>)の一部を紹介したい。本書は「19世紀末から1980年代にかけてのドイツにおいて著しい発展を遂げたブッククラブの盛衰を時代の変遷と共に精緻に論じたものである。一般にブッククラブといえ、本を安価に提供する会員制組織といった安易なイメージで捉えられがちだが、本研究はそれを覆し、そこに共同体 *gemeinschaft* (ママ) 形成の契機を見出した」。[…][著者は、現代のブッククラブが単なる書籍販売団体を超えて多角化し、『余暇産業』へと変貌していった姿に、文化状況の反映とともにブッククラブ衰退の予兆を見るが、これは現代の出版界の状況を考える上でもアクチュアルで示唆的な視点を提出しているものと思われる。]「流通面に着目されがちなブッククラブという共同体(ゲマインシャフト)を思想空間形成の契機としてとらえるという視点は非常

にユニークなものであり、日本出版学会賞にふさわしい研究と評価する」。

まことにもっともな評言である。

